

### 社 説

## 海軍思想の普及と謀る可し

日本人が兎角海軍の思想に乏しきは今度の軍備擴張に海陸相對於して割合に海軍の規模の小なるが如きも單に政府當局者の所見に於て然るのみならず廣く事の實際に徴して例へば公私の學校にて兵式體操と云へば一般に陸軍式に限り又近來世間に流行する兒童の軍帽なども陸軍士官の制に擬したるもの多きを見て知る可しが如し畢竟我國戰史の歴史に於て軍と云へば殆んど陸軍に限るの例なるより因習の久しき今日に至るも一般に海軍の思想に乏しくして陸軍の重きを置くものなる可し敢て怪しむに足らざれば海軍擴張は何れの點より見ても目下立國の必要にして苟も忽にす可らず政府に於ても今後夫れ一の計畫あるもたらんれば國民一般の思想かくの如くにして軍人たらんとするに陸軍を重むるの多しを志すものは少くなく軍備は出奉るも乘機員に乏しきを告るもたらんには擴張の目的は容易に達す可らず一昨年來の戰爭に對しては海軍は世界に對して内の人心に自から其効力の著しきと感ぜしめたる昔なれば實に有様と如何と云ふに陸軍は全國皆兵の仕組にして如何なる軍制にても兵士を出さざるの地なく其兵士が戰場に功名を建て勳章の榮譽を荷ふて郷里に歸るもの多きが故に人々自から海軍の心を起して陸軍を重んずるの偏あるに反し海軍の効力は斯くまで著しきにも拘はらず只これを耳に聞くのみにして軍艦は申す迄もなく親しく其軍人に接するも乏しき其故は種々ば所謂百聞一見の喩に據れずして心を傾くものも自から少くならざるを得ず即ち世間に尙ほ海軍思想の乏しき所以にして實に國民の欠點にみおれば目下戰勝後の機會に際し種々に研究して一般に其思想の普及を謀るの一事は經世家の勉む可き所なり其方法に就ては人々自から考ふるも乏しき其考は一にして足らざるもたらんれば試に我輩の愚付きを述べんに

一 海上の警備巡航の都合を見計ひ成る可く軍艦水雷艇を内國各地の港灣に廻航し數日間碇泊して公衆の觀覽を許し乗組員は親しく一般人に接して海軍の技術功能もしくは海軍の經歷談を試み可し近來當局者も此邊に注意したるもの各地に軍艦巡航の沙汰あるが如くなれば我輩の注文にては尙ほ一層その事を勉めて海軍の發達し得る港灣には必ず軍艦を碇泊し又軍艦の入りと能はざる處には水雷艇を碇泊せしむるも可し爲す可し

二 黄海の海戰に手拍を頼はし又威海衛の攻撃に水雷艇の夜襲を試み功を奏したる海軍人々の如きは夫れ其功を世間に輝かして衆人の耳目を惹かしめんが爲めに國中有志の人々が資金して何か人の目に輝かせんが爲めに國を離りて軍人に歸するの意を表す可し

三 海軍の學問の普及は海軍の軍艦、艦内勤務の體裁を以て海軍士官として説明せしむ可し其體裁をパノラマの趣向にするも最も妙なり

四 海濱地方の學校にては兵式體操に海軍式を用ひしめ假令公府上水練の迂濶は免れざるも兎に角に水兵勤務の一斑にても知らしむるが如き自から一法なる可し

其他種々の方法もあるもたらんれば凡そ右等の趣向にして公私の企に拘はらず一般に其事を奨励し海軍に従事するを以て男子の名譽と爲すの風を養ふ其中にも利に赴くは人情の自然なれば一方に於ては我輩の曾て論じたる如く海軍軍人の俸給を増して名利の双方より人心を誘導するも海軍思想普及の目的を達するも難きに非ざる可し敢て世人の注意を望む所なり

### 土匪掃討の報告

二十日正午十二時一分發北嶺  
二十一日午前三時 著

今橋中佐は十八日大平頂及びワロヨウの土匪を掃討せり大平頂には土匪約百五十名ワロヨウには二三百ありワロヨウの賊は悉く銃を擡へ居たるが如し首領カランヨウも亦賊地にありしもの如し土匪は多くはアイサンの方に逃走せり大平頂ワロヨウに土匪の集るもなきは保し難しと雖も最早や當分は彼より襲來る等の勢力はなかるべしと推測せらる此戰に戦死卒一、負傷士官、卒三あり今橋は當分森林に止まり別に内藤少佐に二中队を附し北斗に派遣せり松居少佐及び石塚大尉の報告に依れば石塚大尉は十七日拂曉攻撃に轉じ午前九時四十分埔里社を恢復せり此攻撃中該地附近の隘丁及び溝邊は概ね我軍に好意を表し頗る我軍を援助せり此戰に於て月前中尉戦死外上等兵一負傷、松居少佐の隊は十六日林相埔出發の後困難なる行軍を爲し土匪を掃討しつゝ十八日午前埔里社に進入し石塚と合したり十六日より十八日まで即死二、負傷十一、行衛不明一、斃馬三頭、松居大隊は埔里社に駐せしむる營、嘉義益田中佐の報告に依ればワロヨウの土匪は我攻撃に先立ち逃走し該村落及び其附近土匪の大部はナイホシヨウに(嘉義の東方ナイエウ)他の一部はウンスイケイ方位に逃走せり右の如く各地集團の土匪は撃散し各守備地は回復せり

明治二十九年七月二十一日

露清銀行と滿州鐵道 露清銀行が滿州を経て北京へ鐵道を布設するの許可を得たる由は此程の紙上に記載せしが今又モスコイ府よりの報なりとて填地利新聞に掲載する所に據れば右の線路中露領に屬する地方に就ては同國政府資本と特典を與へ又支那領に於ては支那政府同様の事を爲す旨にて資本の高は金貨一億留なり此事に付き専ら周旋の勢を執りしはセントピータースブルグ府の通商銀行取締役ロスターン氏なりと云ふ

秀調の代り役 明治座に出動中の坂東秀調は微恙に罹り一番目鏡山の木初は押し助め居れば二番目伊勢音度の萬野は三樹稻丸が代り助める事と爲りたり

### 市村屋の臨時休業

同座の狂言神代杉常總奇聞は毎度録載に上せんとして或る華族より故障を申入れしなどかいつるもの筋書に似たる所ありと加て其筋の説話を受け場割井に道具類の取替へ等に已むを得ず昨二十一日二十二の兩日休業し明二十三日が再度の返り初日なりと

### 女武者

第四十四回 重圍の美人

時は維五月十一日、夏山の木蔭に涼風起りて、賊に取らば打附の旗なりけり。源平兩軍互に陣を布き列ねて、矢戦に時を移すのみ、其日は太刀を台す事も無く華れの晝も來つて戦ふ事をなさざる平家の軍勢は早や我方の陣にあり。

人は杖を舍み馬を卷きたる源氏の將士は、巴が自らの持口より、暗を探りて静々と寄せ合せぬ。不知案内の敵兵を一舉して俱備無難の地獄谷に追落さんと謀りたる、木曾が神算を怖しけれ。

平家は今夜も源氏の寄すぞとは知るよしも無し、一夜は鐵を枕の丸鬘して、暮しき都の夢や結ひけん鬘は修羅の岐に生死の程も定かならず、今夜一夜の命なり、源氏も同じ思ひに明しなん、如何で寄する事の有るべきぞと、軍令を破つて密に酒を酌む陣々の篝火は消えて、夜無枕とて玉漏しの物凄し。

時分はよしと口次郎兼光は五百匹の牛の角に。松明結びつけたるを先に立て、一時に火を放ちたる火牛の陣、後より闇の聲を揚げて逐ひければ、追手揃手四方八方より、同じく驚波を合して大鼓法鼓を奏めなりし、射手を揃へて獲目標を射上る程に、山彦答へて幾千萬の勢とも知らず、道は狭し山は高し我先くと進む程に、人馬共に押壓されて、終には矢をばけ箭を外すに及ばず、無二無三に押上る。

平家は兩方の中に取込められ、驚いて開は合せたれど、如法暗夜の事なれば、如何せんぞ狼狽の中に途を失ひ、敵は迫りぬ、走らんとすれど打物なし、弓取る者は矢をとりず、矢を負へど、弓を忘れ、身を棄て甲をつけず、太刀一つには二人三人取付き、弓一張には四五人して踏みつき、馬には倒れ乗つて後へあがせ或は薙刀を逆につきて自ら足を突切つて立上らざるもあり、只吾勝に走る陣に、われよといふ間もあらせず、忽ち地獄谷に陥りたり、されども暗さは暗し、先陣落ちたるを後陣は知らず、遂は此一方のみの外になしど、狭みにもんで走る程に、馬には人、人には馬、馬の上に落かさなり、隣に平家の一萬八千餘騎、累々として地獄谷を埋めける、陣や平家積惡の報い來て、斯る無難の有様をやらん、中々只事にはあらざりけりと思へて、身の毛もよ立つ計りなり。

巴は眼を望まぬにはあらねど、願ふ所は法師聲明の首なり、夜中の戦は誰の功とも分けがたくして、敵を破るは本意なしと思えければ、合圍の開を待ちて驚が織より攻入りしもの、途の中央にして横山へと走せ



下り、落ち来る平家、けなやまさんと待構之、外はよもあらせじ。

夜も漸々明け行く儘に、ちまされ、大將軍の肩なれば、名ある大將も、な驚明法師も、手勢の軍の寄せぬ先みそと、黒糸織の腹巻に赤銅作もあらんずらんと思はせたる大家の齋明法師、手勢流矢一つ負ひもせ腹の勇氣尚ほ揚々としに當りて橋を列ね陣をは知るよしもなく、借の陣して、人々を易手功を誇りたさに、此近くなるまに、齋明「夫なる御陣は誰人に